

武蔵野日曜集会 降誕節

預言と福音

――創世記、民数紀略、申命記ほか――

1985年12月22日

小池辰雄

キリストの預言 婦の苗裔 彼の来る時 一箇の星・一條の杖 一つの義しき枝 一人の牧者
インマヌエル ひとりの嬰兒 エホバの僕 屠場にひかるる羔羊の如く キリストの十字架の
贖い 聖霊の光の世界

【創世記3】

15 又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん。彼は汝の
頭を砕き汝は彼の踵を砕かん。

【創世記49】

8 ユダよ汝は兄弟の讃る者なり。汝の手はなんじの敵の頸を抑えん。なんじ
の父の子等なんじの前にかがまん。9 ユダは獅子の子の如し。わが子よ汝は
所掠物をさきてかえりのぼる。彼は牡獅子のごとく伏し、牝獅子のごとくう
ずくまる。誰か之をおこすことをせん。10 杖ユダを離れず、法を立つる者そ
の足の間をはなれることなくして、シロの来る時にまでおよばん。彼に 諸
の民したがうべし。

【民数紀略24】

17 我これを見ん然れど今にあらず、我これを望まん然れど近くはあらず、ヤ
コブより一箇の星いでん。イスラエルより一條の杖おこり、モアブをこなた
よりかなたに至るまで撃破り、また鼓譟者どもを尽く滅ぼすべし。

【申命記18】

15 汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一箇の預言者を汝のため
に興したまわん。汝ら之に聴くことをすべし。

【ミカ5】

2 ベレレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小さき者なり。然れどもイスラ
エルの君となる者汝の中より我がために出づべし。その出づる事は古昔より
永遠の日よりなり。3 是故に産婦の産みおとすまで彼等を付しおきたまわん。
然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とともに帰るべし。4 彼はエホバの
力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちてその群を牧い之をして安然



に居らしめん。今彼は^{はて}大なる者となりて地の極にまでおよばん。……⁷ヤコブの遺余者は衆多の民の中に在ること人に頼らず世の人を俟ずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん。

【エレミヤ23】

⁵エホバいいたまひけるは、視よわがダビデに一つの義しき枝を起こす日來らん。彼王となりて世を治め榮え公道と公義を世に行うべし。⁶其の日ユダは救をえイスラエルは安きに居らん。其の名はエホバ我等の義と称えらるべし。……⁸イスラエルの家の裔を北の地と其諸て逐いやりし地より導き出せしエホバは活くという日來らん。

【エレミヤ33】

¹⁵その日その時にいたらばわれダビデの為に一の義き枝を生ぜしめん。彼は公道と公義を地に行うべし。¹⁶その日ユダは救をえ、エルサレムは安らかに居らん。その名はエホバ我らの義と称えらるべし。

【エゼキエル17】

²²主エホバかく言いたもう、我高き香柏の梢の一を取りてこれを樹え、その芽の巔より若芽を摘みとりて之を高き勝れたる山に樹ゆべし。²³イスラエルの高山に我これを植えん。是は枝を生じ果をむすびて榮華なる香柏となり諸の類の鳥皆その下に棲いその枝の蔭に住まわん。

【エゼキエル34】

²³我かれらの上に一人の牧者をたてん。其人かれらを牧うべし。是わが僕ダビデなり。彼はかれらを牧い彼らの牧者となるべし。²⁴我エホバかれらの神とならん。吾僕ダビデかれらの中に君たるべし。我エホバこれを言う。

【エゼキエル37】

²⁴わが僕ダビデかれらの王とならん。彼ら全体の者の牧者は一人なるべし。彼らはわが律法にあゆみ、吾法度をまもりてこれを行わん。²⁵彼らは我僕ヤコブに我が賜いし地に住まん。是其先祖等が住いし所なり。彼処に彼らとその子及びその子の子とこしなえに住まわん。吾僕ダビデ長久にかれらの君たるべし。²⁶我かれらと和平の契約を立てん。是は彼らに永遠の契約となるべし。我かれらを堅うし、彼らを殖し、わが聖所を長久にかれらの中におかん。²⁷我が住所は彼らの上にあるべし。我かれらの神となり、彼らわが民とならん。

【イザヤ7】

¹⁴この故に主みずから一の予兆をなんじらに賜うべし。視よ、おとめ孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称うべし。

【イザヤ9】



6 ひとりの嬰兒^{みどりご}われらのために生まれたり。我等はひとりの子をあたえられたり。政事^{まつりごと}はその肩にあり、その名は奇妙また議士、また大能の神、とこしえのちち、平和の君となえられん。7 その政事と平和とはましくわわりて窮^{かぎ}りなし。且ダビデの位にすわりてその国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをもてこれを保ちたまわん。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。

【イザヤ11】

1 エッサイの株より一つの芽いでその根より一つの枝はえて実をむすばん。2 その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。3 かれはエホバを畏るをもて歡樂^{たのしみ}とし、…… 4 ……その口唇^{くちびる}の氣息^{いき}をもて悪人をころすべし。…… 7 ……獅はうしのごとく藁^{わら}をくらい……

【イザヤ42】

1 わが扶^{たす}くるわが僕わが心よろこぶわが撰^{えらび}人を見よ。我わが霊^{みたま}をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。2 かれは叫^いぶことなく、声をあぐることなく、その声を街頭^{ちまた}にきこえしめず。3 また傷^{いた}める蘆^{あし}をおることなく、ほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく、真理^{まこと}をもて道をしめさん。4 かれは衰^{おし}えずして喪胆^{きおち}せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言^{おしえ}をまちのぞむべし。

【イザヤ49】

3 また我にいい給わく、汝はわが僕なり、わが栄光のあらわるべきイスラエルなりと。

【イザヤ50】

2 わがきたりし時なによえ一人もおらざりしや。我よびしとき何故ひとりも答うるものなかりしや。わが手みじかくして贖^{あがな}いえざるか。われ救うべき力なからんや。視^みよわれ叱咤^しすれば海はかれ河はあれのとなり、そのなかの魚は水なきによりかわき死にて臭氣^{くさけ}をいだすなり。…… われを義とするもの近きにあり。たれか我とあらそわんや。われら相共にたつべし。わが仇はたれぞや。近づきたれ。9 主エホバわれを助け給わん。誰かわれを罪せんや。視よ、かれらはみな衣のごとくふるび^{しみ}のたにくいつくされん。

【イザヤ53】

3 かれは侮^{あなづ}られて人にすてられ、悲哀^{かなしみ}の人にして病患^{やまい}をしれり。また面^{かお}をおいて避^{さく}ることをせらるる者のごとく侮^{あなづ}られたり。われらも彼をとうとまざりき。



4 まことに彼はわれらの病患をおい、我等のかなしみを担えり。然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。5 彼はわれらの愆^{とが}のために傷けられ、われらの不義のために碎かれ、みずから懲罰^{こらしめ}をうけてわれらに平安^{やすき}をあとう。そのうたれし瘡^{きず}によりてわれらは癒されたり。6 われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

7 彼はくるしめらるれどもみずから謙^{へりく}だりて口をひらかず、屠場^{ほふりば}にひかるる羔羊^{こひつじ}の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くしてその口をひらかざりき。

【イザヤ59】

21 エホバいい給わく、なんじの上にあるわが霊^{みたま}、なんじの口におきたるわがことばは今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。

【イザヤ60・1】

1 起よ、光^{あき}を発^{はな}て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出^{てりいで}たればなり。

●キリストの預言

今日は一番昼の短い冬至ですね。私にとつては、これは正に45回目のクリスマスです。けれども、毎年同じような内容なんですけれども、ひとつも古い感じはしないので、いつも新しい。それが本当の新鮮さというものです。

伝道の方法はいろいろありますから、皆さんも大いに積極的によってください。まあ、人はいろいろですから、無理は言いませんが。しかし、伝道は、究極のところは一对一人です。ひとりどういう隣人でも——出会う人が即ち隣人ですから——それにパンフレットをあげるなり、また助言して語るなり、どなたでも聖霊の世界に入っていれば、できますから。今はもう遠慮は絶対にダメです。大胆にやってください。

今日は、「預言と福音」という題でクリスマスを迎えたのは、おそらく今日が初めてです。実は、「預言と福音」というのは、私は自分の雑誌をそういう名前にしようと思った。初めにそういうのを刷ったのがあります。それが「曠野の愛」ということになった。そうしたら、期せずして、旧約聖書の研究で日本のオーソリテイの関根君が——私の数年後輩ですが——自分の雑誌を、「預言と福音」という雑誌を出して、ずっと続いています。あ、君がそういうのを作ったか」ということであつたけれども。

旧約聖書は、「律法と預言者」という言い方をユダヤ人はする。「トラー・ネビーム」といって、キリストも、「律法と預言は」というような言い方をとどころでしている。



それは「旧約聖書」ということです。

「その律法と預言は私を証しているんだ」

と、キリストは言われた。そういうわけで、この旧約聖書は即ち、全体としてキリストの預言なんです。特にキリストの預言として受けとられるようなところをいくつか、今日はあげながら、お話ししたいと思います。

●婦の苗裔

一番先は創世記3章15節。これはエバが蛇に誘われて、そして遂に樂園喪失の、パラダイス・ロストの原因を作ってしまった。それに対して、エホバの神さま即ちヤーヴェー、イスラエルの神さまが蛇に向かって語られる。これはもちろん神話です。神話ですけれども、こういう神話的な形をもつて非常に深いことが言われているわけです。

「¹⁵又我汝と婦の間および汝の苗裔と婦の苗裔の間に怨恨を置かん。彼は汝の頭を砕き汝は彼の踵を砕かん。」(創世記3・15)

この場合の「婦の苗裔」というのは——もちろん、これを書いている人はそんなことは全然分かってない。これを預言として受けとるのは、御霊の力によるわけですけども——即ち、女の裔であるところのキリストが、サタンの使いである蛇——要するにそれは蛇をもつてサタンのことを表している——サタンをやつつける。しかしながら、サタンはまた非常に女の裔を損なう。「踵を噛む」という。人間がいかにもまたサタンにやつつけられる面があるかという面が出ているんですが、しかし、頭をやつつけられる方がもう決定的なことなんで、キリストがサタンと一騎討ちをして、サタンに勝ちましたね。荒野の試みという。そのことの預言として受けとるわけです。もちろん、客観的にこれを預言ということはできませんけれども、この聖書を新約の光をもつて見るときに、この不思議な言葉が預言として受けとられる。最初のものです。

●彼の来る時

その次に、創世記49章10節を見てください。これはヤコブが——ヤコブの別の名前はイスラエルというわけですが——それが自分の十二人の子どもたちに、十二支族に対して遺言的なことを言っているところです。ルベン、シメオン、レビ、ユダ、ヘブルン、イッサカル、ダン、ガド、アセル、ナフタリ、ヨセフそしてベニヤミンというわけです。8節からユダのところですが。このユダ族というのは非常に選ばれた支族でありまして、まあ非常に皮肉なことにはキリストを売ったのもこのユダという名前ですけれども。

「⁸ユダよ汝は兄弟の讃る者なり。汝の手はなんじの敵の頸を抑えん。なんじ

の父の子等なんじの前にかがまん。⁹ユダは獅子の子の如し。

非常に強いということです。



わが子よ汝は所掠物^{えもの}をさきてかえりのぼる。彼は牡獅子のごとく伏し、牝獅子のごとくうづくまる。誰か之をおこすことをせん。

そういう猛獣の光景をよくそのまま描いています。その次の10節です。

10 杖ユダを離れず、法を立つる者その足の間をはなることなくして、シロ^{きた}の来る時にまでおよばん。彼に諸^{もろもろ}の民したがうべし。」(創世記49・8〜10)

これは原文的にちよつと問題があるところで、「シロ」というのは、どうも「シロ」と読んではいけなくて、「彼」と読んだ方がいいという学説の方が正しいでしょう。「杖ユダを離れず」という。「杖」というのは「笏^{しやく}」のことで、権威を表すところのものです。これが「ユダを離れず」というので、ユダ族にそういつた権威は来ているが、それが離れないという。「法を立つる者その足の間をはなるることなし」とは、立法者——これはもちろん旧約の世界ですから、「杖」というのは王権です。笏を持つているから王権です——また、神の律法をもつて統べ治めるという角度から言われている言葉です。「彼の来る時にまでおよばん」という。この「彼の来る時^{きた}」という、その「彼」が即ち、預言的には「キリスト」ととられるわけです。「シロ」というのはもちろん昔のサマリヤにあるところの都なんですから、しかし、これは「シロの来る」というのは、どう考えてもおかしい。

「彼の来る時にまでおよばん。彼に諸の民したがうべし」

と。もちろん、これは地上の王者、メシヤとしての王者のことに旧約では言われているけれども、これはやがてキリストへの預言とみるといったようなことを言うわけです。

●一箇の星・一條の杖

もう少しキリストに近いのは、民数記略の24章17節です。

「¹⁷我これを見ん然れど今にあらず、我これを望まん然れど近くはあらず、ヤコブより一箇^{ひとつ}の星いでん。イスラエルより一條^{ひとつすじ}の杖おこり、モアブをこなたよりかなたに至るまで撃破^{うちやぶ}り、また鼓譟^{さわたつもの}者どもを尽く滅ぼすべし。」(民数紀略24・17)

ここにも「杖」と書いてある。不思議なことに、「星」という言葉が出てくる。キリストのことは、「明けの明星」というような言い方もされている。この場合の「星」というのは、光の象徴です。しかもこれは、キリストが現れた時に非常に不思議な星が出たわけですから。天文学的にもあれは正しいらしい。これは偉大なる光を持っている人の徴として、「星」という言葉を言う。ダンテが非常に星の好きな詩人でしたけれども。そういう意味です。またあるときは、義の太陽にも譬えられます。要するに、星と言ったって、それは遠くから星に見えるので、もの凄い太陽ですから。

それから、ひとすじの「杖」、これも先程から申し上げておおり、王者としての、メシヤとしての徴の言葉です。「杖」だとか、「芽が出る」とか、そういう言い方がイザヤ書に



も出てきます。それはやがてそういう星と仰ぎ、杖と仰ぐところの神の権威をいただいているところの光ある存在ということです。

それから、その次の申命記18章15節。モーセは素晴らしい預言者とされているが、

「¹⁵汝の神エホバ汝の中汝の兄弟の中より我のごとき一箇の預言者を汝のために興おこしたまわん。汝ら之に聴くことをすべし。」(申命記18・15)

まあ預言者どころではないんだ、キリストは。モーセのような預言者はその後に出なかったと、別なところにあります。しかし、このモーセ以上の律法を乗り越えたところの新しき律法——こないだ、自由の律法というのをヤコブ書で学びましたね、即ち福音です——それが現れるということが一つの預言とされる。

●一つの義しき枝

まだいろいろありますが、一番近いのはミカ書5章2節。ミカというのは預言者です。

「²ベレヘム、エフラタ汝はユダの郡中にて小さき者なり。然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし。その出づる事は古昔より永遠の日よりなり。」

もう始めから決まっているんだと。

³是故に産婦の産みおとすまで彼等を付しおきたまわん。然る後その遺れる兄弟イスラエルの子孫とともに帰るべし。⁴彼はエホバの力に由りその神エホバの名の威光によりて立ちてその群を牧いやしな之をして安然に居らしめん。今彼は大なる者となりて地の極にまでおよばん。」(ミカ5・2〜4)

という素晴らしい句です。この「ベレヘム、エフラタ」の「エフラタ」というのは地方の名前で、「エフラタのベレヘム」ということです。「ベート(家)・レヘム(パン)」というのは「パンの家」という意味です。面白い名前ですね。

「汝はユダの郡中にて小さき者なり」

と。「郡」という言葉は、ヘブライ語では「いくつかの千」ということで「数千」という意味を持っている。万でないから小さいんです。いと小さき所、ユダから。ベツレヘムはユダの地方です。

「然れどもイスラエルの君となる者汝の中より我がために出づべし」

と。これはマタイ伝2章とヨハネ伝7章にこのことが引用されています。非常にはつきりとした、正に預言と思われるところの句であります。このミカという預言者が不思議なことを示されたわけです。7節に、

「⁷ヤコブの遺余者は衆多の民の中に在ること人に頼らず世の人を俟またずしてエホバより降る露の如く青草の上にふりしく雨の如くならん。」

とある。イスラエルは非常に水の少ない所だから、こういう恵みの時に、露だとか雨だと



かいう言い方をするんです。

まあそれはそれとして、もう少し一番、本質に触れるところの預言に今度は段々入っていきます。エレミヤ記23章です。さすがは、エレミヤ、エゼキエル、イザヤとなると、内容が違ってくる。それらの句は、キリストはもう既によく知っていらつしやるので、いかに自分がその預言を全うしなければならぬかということを感じられておられたわけです。エレミヤ記23章の5節、6節。

「⁵エホバいいたまひけるは、視よわがダビデに一つの義^{ただ}しき枝を起こす日來らん。

ここにも「枝」ですね、「セマツハ サツデイク」という。

彼王となりて世を治め栄え公道^{おおよけ}と公義^{ただしき}を世に行うべし。

これは「審判」という字と「義」という字です。

⁶其の日ユダは救^{すくい}をえイスラエルは安きに居らん。

この「ユダ」と「イスラエル」というのは、南の方と北の方と、両方を指した。

其の名はエホバ我等の義と称えらるべし。」(エレミヤ23・5〜6)

エレミヤが出たときに、ユダの王様はセデキヤです。「セデキヤ」というのは、

「ヤーヴェーは義である」

という名前です。セデキヤが最後の王様です。「エホバは義なり」という。正にキリストは神の義です。神の義を体现した人ですから。こうなってくると、いよいよ内容的にキリストの預言と言つても、内容的に非常にはつきりしてくるわけです。

「義」という言葉が出てくる。「一つの義しき枝」という。だから、義の権威を持った者。

「義人なし、一人だになし」

というけれども、キリストだけが神の義人である。即ち、いつも申し上げているとおり、

「神の御意を完全に行ずる者」

を義という。ただ正義ではない。道徳的な正義とは違う。神の御旨を完全に体现する人が義。そのような義人が現れるという。

「⁸イスラエルの家の裔^{すえ}を北の地と其諸^{すべ}て逐いやりし地より導き出せしエホバは活くという日來らん。」

そういう時が必ず来るぞと。

それから、エレミヤ記33章15節に同じような言葉を言っている。

「¹⁵その日その時にいたらばわれダビデの為に一の義^{ただし}き枝を生ぜしめん。彼は公道^{おおよけ}と公義^{ただしき}を地に行うべし。¹⁶その日ユダは救^{すくい}をえ、エルサレムは安らかに

居らん。その名はエホバ我らの義と称えらるべし。」(エレミヤ33・15〜16)

と。「一の義^{ただし}き枝を生ぜしめん」という。非常に「義」という言葉が出てくる。

それから、エゼキエル17章22、23節に、



「²²主エホバかく言いたもう、我高き香柏こすえの梢の一を取りてこれを樹え、その芽の巔いただきより若芽を摘みとりて之を高き勝れたる山に樹ゆべし。²³イスラエル

の高山に我これを植えん。是は枝を生じ果をむすびて栄華さかんなる香柏となり諸の類の鳥皆その下に棲すまいその枝の蔭に住まわん。」(エゼキエル17・22〜23)

妙なことが書いてありますが、「芽」というのは、「ひこばえ」とか「枝」とか、みんな同じような内容のことをいろんな言い方をするけれども、要するに、切られたものから新しい芽がふいてくる。ということは、旧約の世界から本当に新しいものが現れてくるというように、新約の角度からは見ることができる。そういう意味において、エゼキエルは非常に復活を――枯骨の復活なんてことも預言した預言者ですから――非常にこのところは新約的な角度の新しさというものを、こういう言葉でもって感ぜさせられるわけです。

●一人の牧者

それから今度は、同じエゼキエルの34章23節に、

「²³我かれらの上に一人の牧者をたてん。其人かれらを牧やしなうべし。是わが僕ダビデなり。彼はかれらを牧い彼らの牧者となるべし。」(エゼキエル34・23)

と。今度はえらくはつきりしてきます。もちろん「ダビデ」といつても、これは「ダビデ的な人」ということです。ダビデは神の神政を行じた典型的な王様ということから、

「アブラハムの子、ダビデの子」

と、キリストのことをマタイ伝の最初に言われているでしょ。「アブラハムの子、ダビデの子」というのは、アブラハムのごとき信仰者、ダビデのごときメシヤ、即ち、油注がれたところの権威者です。

「かれらの上に一人の牧者をたてん」

という。

「我は善き羊飼いな」

とキリストは言われたでしょ。これはダビデ的なメシヤである。「メシヤ」というのは「油注がれたる者」という意味で、サウル、ダビデ、みんなこれは油注がれたる神の権威を、霊をいただいている者です。まあ、サウルは途中からダメになってしまったけれども。

「²⁴我エホバかれらの神とならん。吾僕わがダビデかれらの中に君たるべし。我エ

ホバこれを言う。」

と。非常にはつきりしている。ここにも「吾僕わがダビデ」とある。王者であるものが神の僕である。これがまたイザヤ書に通じてくる。神の僕として、地上では僕として人に仕える。人を救う。僕というのは、神さまの愛の意志を自ら体現するものが僕ですから。ダビデは権威あるところのメシヤ。このメシヤが地上では僕として神さまの御意を体現する。

このエゼキエル37章の24節から27節を見てください。非常に著しい言葉が出てくる。



「²⁴わが僕ダビデかれらの王とならん。

もちろん、エゼキエルのときにはダビデはずっと前に亡くなっている人ですから、この「わが僕ダビデ」というのは、そういう単なる固有名詞ではない。

彼ら^{すべて}全体の者の牧者は一人なるべし。彼らはわが律法^{おきて}にあゆみ、吾法度^{のり}をまもりてこれを行わん。²⁵彼ら是我僕ヤコブに我が賜いし地に住まん。

ここにも「わが僕ヤコブ」と言っているね。

是其先祖等が住いし所なり。彼処に彼らとその子及びその子の子とこしなえに住まわん。吾僕ダビデ^{とこしなえ}長久にかれらの君たるべし。

永遠の王者だと言うわけです。

²⁶我かれらと^{やわらぎ}和平の契約を立てん。

即ち、本当の和を立てる。「神さまと人との間に和を立てる」という言い方はパウロもその書簡で言っていますが。

是は彼らに永遠の契約となるべし。我かれらを堅うし、彼らを殖^{ふや}し、わが^{きよきところ}聖所^{とこしなえ}を長久にかれらの中におかん。²⁷我が住所^{すみか}は彼らの上にあるべし。我かれらの神となり、彼らわが民とならん。」（エゼキエル37・24〜27）

「我かれらの神となり、彼らわが民とならん」

という言い方は、エレミヤにも出てきます。またこれが黙示録にも通ずるんです。

そういうことで、このエゼキエル37章は非常に著しいところです。牧者であって、としえの契約であると。即ち、これは新約のことです。そういう、

「永遠の契約を結ぶところの牧者が現れる」

という正に預言です。

その37章の前半には、谷間に枯骨がたくさんあって、それが生きているかどうかなんていう、有名なところです。そのうちに息を吹きかけたら、枯骨がみんなつながり合われて、ついに肉も肌もできてしまつて復活したと。これは、

「イスラエルが一辺滅びたけれども、必ずまた復興する」

ということの預言なんです。それを具体的に、また人間の復活の姿をもつて言っている。これはまあ大変な霊的な音信です。エゼキエル書37章1節から10節まで。

その復活自身をキリストは身をもつて証された。だから、エゼキエル書37章というのは、その前半と後半のところにキリストの預言が凄い素晴らしい言葉でもつて表されているということをお忘れなくください。

●インマヌエル

今度はイザヤ書。最後はどうしてもイザヤ書になってしまう。旧約聖書の最高峰のところはイザヤ書ですから。イザヤ書の有名な7章に、「インマヌエル」のことが出ている。



「キリストのことは、インマヌエルと称^いわれる」

ということとはここから来ているわけです。イザヤ書7章14節、

「¹⁴この故に主みずから一の予兆^{しるし}をなんじらに賜うべし。視よ、おとめ^{はら}孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称^いうべし。」（イザヤ7・14）

これは新約聖書にそのまま引用されているところです。この「おとめ」という字は必ずしも処女ではない。この場合のヘブライ語は、妙齡の女がみんなこの「おとめ」です。けれども、新約では、「処女マリヤ」として受けとったわけです。

「視よ、おとめ^{はら}孕みて子をうまん。その名をインマヌエルと称^いうべし」と。
「その名をインマヌエルと称^いう」とは非常に不思議ですね。

「神われらと共に」

という意味ですよ。「イン」というのは「共に」、「ヌ」というのは「われら」、「エール」は「神」。そういう不思議な徴が表れるという。この場合はもちろん、具体的な王様のことを言っているんですけども、これがキリストの預言として受けとられるわけです。

この「神われらと共に」は新約になると、

「ベヌエール」

「神われらのうちに」

なんです。「神われらと共に」は旧約的な言い方になる。「ベヌエール」という言葉はどこにもない。これは私が造ったんだけど。新約になると、

「キリストわれらのうちに」

「エン・クリスト」

ということになるわけです。

●ひとりの嬰兒

それから、非常に著しいところはイザヤ書9章6節です。

「⁶ひとりの嬰兒^{みどりご}われらのために生まれたり。

メシヤとして「ひとりの嬰兒^{みどりご}われらのために生まれたり」と。

我等はひとりの子をあたえられたり。政事^{まつりごと}はその肩にあり、

権威がその肩にある。

その名は奇妙

「奇妙」というのは妙な、奇妙な訳し方ですが。

また議士、また大能の神、とこしえのちち、平和の君となえられん。

と、畳みかけて言っている。

⁷その政事と平和とはましくわわりて窮^{かぎ}りなし。且ダビデの位にすわりてその国をおさめ、今よりのちとこしえに公平と正義とをもてこれを保ちたまわ



ん。万軍のエホバの熱心これを成したもうべし。」（イザヤ9:6-7）

「エホバの熱心」の「熱心」という言葉は「妬み」というのと同じ字です。「妬みの神」という言い方は、「熱心の神」ということ。神さまの熱意、熱心がそれを必ずやるという。そういう驚くべき御霊の知恵と力と権威を持つ者が現れるということであり、先程言った、ミカ書5章5節とか、ゼカリヤ書9章10節とかいうのは、みんなこれと同じような言葉がありますから。

今度は、イザヤ書11章の始めの方。

「エッサイの株より一つの芽いで

ここにも「芽」とあるでしょ。

その根より一つの枝はえて実をむすばん。

「芽」とか「枝」とか言っても、同じ内容のことなんです。これは「エッサイの株より」と。ダビデの父が「エッサイ」というんですから。だから、ダビデの系統から一つの芽が出てくるという。芽とか枝とか、みんなこれはキリストのことです。

²その上にエホバの霊とどまらん。これ智慧聡明の霊、謀略才能の霊、知識の霊、エホバをおそるるの霊なり。

畳みかけてそういった、神を畏れ、神を愛するところの霊だと言う。

³かれはエホバを畏るるをもて^{たのしみ}歡樂とし、

「エホバを畏るるを歡樂となし」と書いてある。云々とずっと読んでいくと、

⁴……その^{くちびる}口唇の^{いき}氣息をもて悪人をころすべし。

これはテサロニケ後書2章8節に似たような言葉がある。

それで、そういう人が来ると、非常な天国的なことが現れるということが6節から9節まで。いちいち読みませんが、猛獣も何も全部悪いことはしない。

⁷……獅はうしのごとく藁をくらい」（イザヤ11:1-7）

なんて書いてある。なぜ、こんな不思議なことを言うかと思うですよ。ということは、いかに神の霊が、生命が、愛が浸透すると、どんな獣でもみんななついてしまつて非常に平和になるという。それは事実そうですね。イギリスにそういうのがいますよ。猛獣を本当に手懐けてしまつていいるやつが。これは本当に愛だけだと言っています。

●エホバの僕

イザヤ書35章は今省きますけれども、イザヤ書の42章1-9節、49章1-7節、50章4-11節、52章13節から53章全部、これがいわゆる「エホバの僕」の有名な五つの歌です。エホバの僕の歌。「エベツ・ヤヴエー」という。これはもうはつきり、キリストの預言です。ここに来て、最高のところに来るわけです。こんなような人はキリストの他に考えられない。だから、キリストはイザヤ書が非常に好きで、よく読まれたね。また、新約聖書で一番引



用されているのはイザヤ書なんです。

では、ちよつとそこのところ少し見ます。イザヤ書42章。

「¹わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人を見よ。

我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。

²かれは叫ぶことなく、声をあぐることなく、その声を街頭にきこえしめず。

³また傷める蘆をおることなく、ほのくらき燈火をけすことなく、

真理をもて道をしめさん。

⁴かれは衰えずして喪胆せずして道を地にたておわらん。

もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。」(イザヤ42・1～4)

素晴らしい訳だね。これは全部、詩です。だから、口語訳は詩の形になっているでしょ。口語訳は大変結構です。段落を改めている。預言書は非常に詩が多いんです、詩篇と同じように。伝道の書もかなりあるな。エレミヤ哀歌もそう。とにかく、預言書は非常に詩が多い。詩的に言われている。

そういう、エホバの霊が本当にその上に降っているところの、それ自身が道で、

「我は道なり」

とキリストは言われたが、それが本当に滅びないところの道をたておわる。深い憐れみを持っているという。もうイザヤ書は、この40節からあとはずっと全部、キリストの預言と言つてもいいくらいです。

43章、44章にも素晴らしいところがあるけれども。49章を見てみましょう。まあ、イザヤ書は時々、本当に朗々と読んでごらん下さい。特に文語でね。3節に、

「³また我にいい給わく、汝はわが僕なり、わが栄光のあらわるべきイスラエ

ルなりと」(イザヤ49・3)

イスラエルの中で選ばれた、特に預言者たち。その中でまた選ばれたただ一人の人。だから、イスラエルという複数で言つても、結局は一人の単数に帰するんです、最後は。それから、一人の単数からまた複数が出てくる。

複数と単数とが非常に相互関係になる。一即多、多即一の関係になる。これは西田哲学みたいです。こないだから少し西田さんを読んでいるけれども、素晴らしいね、やつぱり西田さんは。日本の哲学者ではもう第一人者だな。あの人は禅の世界でかなり詳しく体験した人ですから。最後は宗教哲学になっています。キリスト教も深く掘んでいる。

●屠場にひかるる羔羊の如く

50章4節から11節。これは特に2節、

「²わがきたりし時なにゆえ一人もおらざりしや。

我よびしとき何故ひとりも答うるものなかりしや。



わが手みじかくして贖いえざるか。われ救うべき力なからんや。
視よわれ叱咤すれば海はかれ河はあれのとなり、

そのなかの魚は水なきによりかわき死にて臭気をいだすなり。」（イザヤ50・

2）

非常に孤独である。どうして分かってくれないか、というわけです。「贖い」と「救う力」とは同じことです。別な言い方をしている。

「8われを義とするもの近きにあり。たれか我とあらそわんや。
われら相共にたつべし。わが仇はたれぞや。近づききたれ。

9主エホバわれを助け給わん。誰かわれを罪せんや。

視よ、かれらはみな衣のごとくふるび蠢のためにくいつくされん。」（イザヤ

50・8～9）

この預言者は非常に孤独で、みんなに誤解もされて、迫害もされているから、こういうような言葉が出てくる。だから、

「捨てられたる隅の首石」

ということなんです。

イザヤ書53章はあまりにも有名なところですよ。3節、

「3かれは侮られて人にすてられ、悲哀の人に^{かなしみ}して病患をしれり。

また面をおおいて避ることをせらるる者のごとく侮られたり。

われらも彼をとうとまざりき。

4まことに彼はわれらの病患をおい、我等の^{かなしみ}を担えり。

然るにわれら思えらく彼はせめられ神にうたれ苦しめらるるなりと。

彼はせめられて神に苦しめられて^{いる}んだと思った。とんでもない間違いをしたと。

5彼はわれらの愆のために傷けられ、われらの不義のために砕かれ、

私の「砕けの神学」の「砕け」というのはここからきているんです。

みずから懲罰をうけてわれらに平安をあとう。

そのうたれし痕によりてわれらは癒されたり。

6われらはみな羊のごとく迷いておのおの己が道にむかいゆけり。

然るにエホバはわれら凡てのものの不義をかれのうえに置きたまえり。

我々の罪を全部担った。キリストの贖いというものは、それが十字架なんです。

7彼はくるしめらるれどもみずから謙だりて口をひらかず、

屠場にひかる羔羊の如く毛をきる者のまえにもだす羊の如くして

その口をひらかざりき。」（イザヤ53・3～7）

何も抗弁はしない。黙って受けとっていた。云々と。こういうわけです。大変なところだ。どうしてこんな預言が出てきたかと。この預言者自身が非常にそういった苦難を持った人



でしょう。これは無名の預言者です。イザヤ書の40章から55章の、一番旧約聖書の素晴らしいところは、「偉大なる知られざる預言者」という。そういうように、キリストの預言はイザヤ書53章で極まる。

●キリストの十字架の贖い

我々の全存在を、過去・現在・未来の私たち一人びとりの全存在を、私を贖いとった。

「何も心配は要らんぞ」

と。我々はみんなエゴイストだからね。

「エゴイズムは全部、私が引き受けて、お前はもうエゴイズムのない人間に、根底はしたのだ」

と。これは絶対無条件の恩寵なんですから。我々は相変わらずゴタゴタしたって、そんなことは関係ないんだ。その奥の世界です。奥の世界で本当に贖った。その本当に贖われたことを本当に受けとったら、これは聖霊が来ざるをえないんですよ。どうして聖霊を受けないかと思うんです、正直。

キリストの十字架の贖いを我々は三大節で——クリスマスであろうと、復活節であろうと、ペンテコステであろうと——十字架を語らないではいられない。救いの根底なんだから。あらゆる人間の自己の問題、人間関係の問題は全部、十字架でもって解決がつく。これで解決のつかないものは一つもない。それは全部、キリストが負ってしまったから。

「ああ、そうでしたか!」

と。そうすると、こっちは空っぽになってしまう。そこにはそこで、

「主さま!」

と言えば、もう直ちに聖霊がやって来てしまう。その十字架を受けとって、「主さま!」と叫び入る。叫び入ってごらんさい、全存在で。そうしたらもう、俄然、聖霊の世界に入る。これはぜひ体験していただかなければ。

「いや、本当に楽になりました。力が来ました」

と、はつきり言ってくださいよね。「そうですか、まだ私はそこまでいきません」なんて。「そこまでいきません」ではない。

「今ここにおいて直ちに」

という世界です。

私は無教会にいたとき、そこまで行かなかったんだよね。20歳から1950年の46歳まで。この1950年の11月3日、手島君のグループもこれを幕屋のペンテコステと言っている。それまでずいぶん時間がかかっている。約30年。あなた方、「これから30年たってから聖霊を受けます」なんて、そんなこと言ったら承知しないぞ(笑)。

もう直ちにです。今日直ちにこの聖霊の世界に入らないと。この祈祷会で本当に入って



くださいよ。クリスマスはキリストの霊を受けとる日なんで、自分自身がキャンドルになる日なんです、自分自身がキリストの炎です。火をもってバプテスマするという。

●聖霊の光の世界

このイザヤ書のところはそこまで来ていない。この53章は贖いのところで終わっている。それから、この聖霊のことは、第三イザヤではちよつとそれが出てくる。イザヤ書59章16節から21節までは大事なところだな。21節に、

「²¹エホバいい給わく、なんじの上にあるわが^{みたま}霊、なんじの口におきたるわがことは、

「霊」と「ことば」は同じ。

今よりのち永遠になんじの口よりなんじの裔の口より汝のすえの裔の口よりはなれざるべし。わがかれらにたつる契約はこれなりと。此はエホバのみことばなり。」（イザヤ59・21）

そして、

「^{おき}起よ、^{はな}光を^{てりいで}発て、なんじの光きたり、エホバの栄光なんじのうえに照出たればなり。」（イザヤ60・1）

とある。贖いから、そういう聖霊の光の世界に入る。だから、このクリスマスは、午前の集会でこの贖罪のところを本当に受けとって、

「もう、私たちは罪の奴隷ではありません。罪なんか、暗黒なんかは見ません。あ

なたの光を見ます」

というわけです。

「光」とは素晴らしい字だね、この字はもともと太陽から来ている。だから、漢字は世界最高の文字だと言っている。太陽から七つの光の線が出ている形からきている。だいたい、日本の国旗は太陽ではないですか。こんな太陽という素晴らしい国旗を持っていて、日本人は国旗を尊重しないでとんでもない話だ。国旗を尊重すると、「軍国主義」だと言う。軍国主義ではない。福音主義なんだ——「主義」ではない——福音なんだ。

もう、あなた方は、本当に恐れなくやってくださいよ。今の世の風潮に逆行して行かなければダメです。それで必ず勝ちます。それは、キリストはもう最高の力を持っているから。それではそこまでしておきましょう。

